

幼児の読み行動の発達に関する研究

佐藤 公代

(教育心理学研究室)

(平成6年9月30日受理)

問題と目的

佐藤公代(1993)は、絵本の挿絵の役割の外的・内的条件の解明を行なった。外的条件とは、挿絵そのものとして、「挿絵の有無、具体的挿絵と抽象的挿絵、彩色のある挿絵と無彩色の挿絵」、挿絵との関連として、「原話と改話の文章、詳細型とあらすじ型の文章、登場人物の表情の有無、肯定的、否定的に書かれた主人公、完全、不完全な挿絵と動的、静的な挿絵」、提示の仕方として、「教示の仕方、聴覚呈示と視覚呈示」を取り上げている。他方、内的条件とは「主体的条件」とみなし、「視点、構えの問題」を設定している。

水谷孝子(1988)は、「絵本をめぐる研究文献」の中で、次の4分野に分類している。それを列挙する。

(I)絵本に対する意識、絵本環境等についての調査研究。たとえば、母親や学生、現場の保育者等に対し、子どもの好きな絵本、与え方、保育の場における絵本の整備状況や利用の仕方についてアンケート調査をしたもの。

(II)絵本そのもののもつ特徴や機能、内容についての分析研究。たとえば、絵本に用いられている話の種類と量、絵本の物語構成の特徴、絵の評価基準などを考察したもの。

(III)IIの対象となった絵や文章、構成等を実験変数として用い、絵本の読み聞かせ後の質問、再話、再構成等を手がかりに、幼児の記憶や思考の発達について考察したもの。

(IV)絵本の読みきかせ中の、乳幼児の反応分析を通して、言語発達、特にその初期過程をとらえようとする研究。

佐藤の研究は、水谷の分類によれば、(III)の問題設定のもとに行なわれた研究であるといえる。

水谷はエリザベス・サルツビーの「読み行動のカテゴリー」を紹介しているが、このカテゴリーはごく大ざっぱなものであるともみなされている。そのカテゴリーを以下に示す。

〈レベル1〉命名と注釈

ゆび指しをしながら命名したり、自分の興味あることについて説明したりする。

〈レベル2〉動作の再現

ページをたたいたりこすったり、登場人物の動きをしてみせたりする。

〈レベル3〉対話的話しことばで語る

声に抑揚をつけたり、音声を使ったりして物語を語る。聞き手の方をふりかえって話すのが特徴。

〈レベル4〉独自の話しことばで語る

聞き手にむかって話し掛けるということはないが、聞き手も一緒に絵本の絵を見ているという状況依存の上に成り立つ読み行動。

〈レベル5〉読みと語りの混合

話しことばと書きことばの混合による読み行動。

〈レベル6〉創作的語り

創作的書きことばによる読み行動

〈レベル7〉ことば通りに語る

書かれているのと同じことばがところどころ聞かれる読み行動

〈レベル8〉「読めない」という意識

「ココ、ナンテカイテアルノ？」

「ココ、ワカラナイ」

〈レベル9〉飛ばし読み

分からないところを飛ばして読む読み行動

〈レベル10〉読めることばに置き換えて読む

〈レベル11〉ひとり読み

一人で読み通す。

この11のカテゴリーは、確かに、大ざっぱなものであるかもしれないが、順序性については参考になるであろう。

本論は、幼児が自分の好きな絵本を与えられた時、どのような読み行動をするかについて、下記の視点で検討することを目的にする。すなわち、

- (1) 幼児に好きな共通の絵本を与え、言語発達の側面から、記憶の再生、創造語を指標として、年齢発達の過程を検討する。
- (2) 認知発達の側面から、絵本の場面状況と比較しながら、お話作りのことばの特徴や再生の手がかりとなるものは何かを探る。
- (3) サルツビーの読み行動の11のカテゴリーを検討する。

仮説は次の通りである。

- ① 幼児は加齢に伴って、より多くの言葉で正確に語れるだろう。
- ② 幼児は加齢に伴って、本文にはない表現でより想像的に語れるだろう。
- ③ 各場面毎の特徴をとらえることで、幼児の「読み行動」の一般的特徴が見いだせるだろう。
- ④ 幼児の読み行動は、サルツビーの11のレベルの1つ1つの段階をふんで発達していくのではなく、複数のレベル要素を含んでいるだろう。

方 法

- 1) 実験期日：1993年11月4日～7日
- 2) 被験児：N保育園，3歳児7名，4歳児14名，5歳児10名，計31名。
- 3) 材料：絵本「ももたろう」(松居直，文，赤羽末吉，画，福音館書店，1980)
- 4) 手続き：読書環境を知るために、宮野英也(1970)が、小学生対象に行なった調査を、各家庭の父母に行なう。その後、絵本に興味をもたせるために、「ろくべえまってろよ」(灰谷健次郎，作，長新太，絵)，「くろいうさぎとしろいうさぎ」(ウィリアムズ文，絵，松岡享子，

訳)、「たろうのともだち」(村山佳子, 文, 堀内誠一, 絵)を3日ずつ, 担任の先生に読みきかせを行なっていただいた。その後, 「ももたろう」の絵本を幼児に読ませる。「ももたろう」を選んだ理由は, ①事前調査で, 幼児が好きな絵本, お話の中で最も支持されていた絵本であること, ②幼児の記憶の中には大体の筋が残っており, 文字が読めない幼児でも読んであげられるという自信がでてくるものであること, ③同じ題名でも出版社によって多少の筋の違いや言い回しの違いがあり, 今まで読み聞かされてきた対象によって, 幼児の再生する言葉にもおもしろい傾向がでてくるだろうという期待がもてること, の3点からである。

どの幼児も「ももたろう」の話は知っている状況とする。そして, 一週間後, 個別に, 「ももたろう」の絵本を手渡して, 「この絵本を先生に読んでくれる?」と問い掛ける。

結果と考察

読書環境調査(28人)の結果, (1)「幼児は絵本やお話が好きかどうか」に対して, 「とても好き」, 「好き」と合わせて $\frac{2}{3}$ 以上の幼児が「好き」と答えている。「嫌い」と答えたものはひとりもない。(2)「お話をしてあげているかどうか」, (3)「絵本を読みきかせてあげているかどうか」に対して, 「お話や読みきかせをしている」と答えた家庭は, 全体の $\frac{1}{3}$, 「していない」家庭は全体の $\frac{1}{6}$ ある。幼児がお話や絵本が「好き」とわかっているながら, 幼児の要求に十分に答えられないという現代の家庭事情がうかがえる。「してあげている」と答えたものの中で, 「週1~2回」が約半分, 「毎日それ以上」と答えたものも $\frac{1}{3}$ ある。お話や読みきかせをした人は, 「母親」…約6割でトップ, ついで「父親」「祖母」「姉」の順になっている。「家族の中に読書好きの人がいるか」に対し, 「母親がそうである」との回答が多い。(4)「幼児が好んで聞いた話ベスト10」は, ①ももたろう, ②三匹のこぶた, ③金太郎, ④さるかに, ⑤うらしま太郎, ⑥かぐや姫, ⑦うさぎとかめ, ⑧シンデレラ, ⑨赤ずきん, ⑩花咲かじいさん, で宮野は「現代の親のよく知っている話, 印象に残っている話の最大公約数のようなもの」と述べている。(5)「好んで読んでもらった絵本のベスト10」は, ①シンデレラ, ②三匹のこぶた, ③白雪姫, ④ノンタンシリーズ, ⑤ももたろう, ⑥おむすびころりん, ⑦おやゆび姫, ⑧セーラームーン, ⑨アンパンマン, ⑩乗り物, の本で, 「親が子どもによく買い与える話の最大公約数のようなもの」と述べている。

幼児の言葉の分類について, 絵本の文章と幼児の言葉を文節で区切り, 同じものを正語(例えば, 本文で「おばあさんは」という表現を「おばあさんは」というもの, 「おばあさんが」など意味的に同じものもこれに属する), 明らかに違うと思われる言葉を誤語(例えば, 雉きじをからす鳥といったりするもの), 自分で創ったと思われる言葉を創造語(例えば, 赤ちゃんという言葉に「可愛い」とか「小さな」等の修飾語を付ける)として数値化し, それらを合計したものを全体語とする。

Fig. 1 に, 各年齢における全体語数, Fig. 2 に, 各年齢における正語数, Fig. 3 に, 各年齢における誤語数, Fig. 4 に, 各年齢における創造語数を示す。

Fig. 1, 2 から, 全体語数, 正語数において, 各年齢間に5%水準で有意差がみられ(それぞれ, $F=3.82$, $df=22$, $F=8.85$, $df=13$), 加齢と共に, 全体語数, 正語数が高まっている。

Fig. 3, 4 から, 誤語, 創造語については, 有意差がみられるほどではないが, 加齢と共に

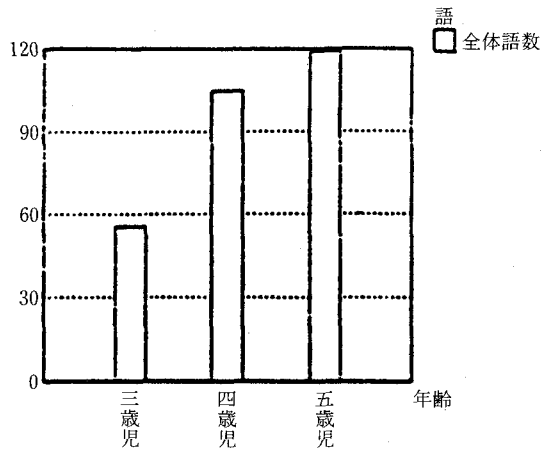


Fig. 1 全体語数の比較

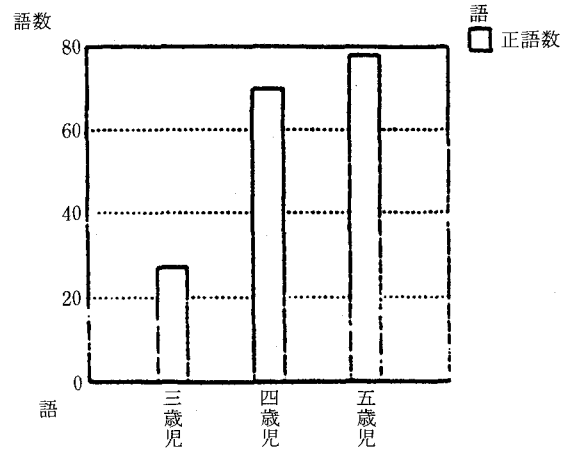


Fig. 2 正語数の比較

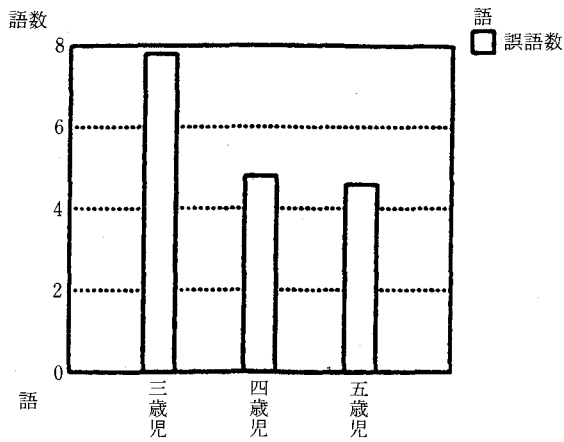


Fig. 3 誤語数の比較

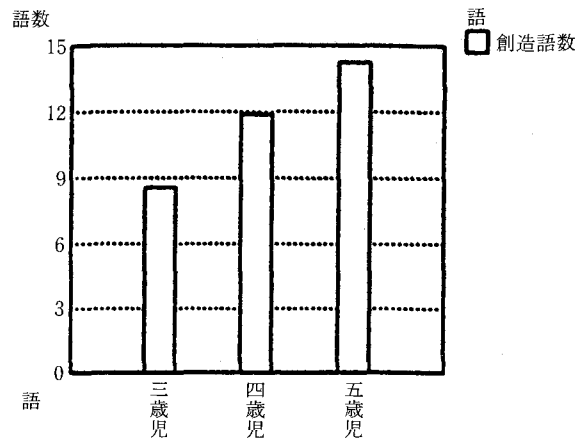


Fig. 4 創造語数の比較

創造語数が高まり、誤数が減少している。

よって、仮説①②は支持される。

Fig. 5 に、各場面における各年齢毎の全体語数を示す。

Fig. 5 から、幼児は物語の前半部分で言葉を多く再生する。その理由として、①物語の前半部分に話の大まかな筋がつまっていること、②物語が長いので幼児の集中力が続かないこと、があげられる。

言葉を多く再生している第1, 7, 9~11場面状況について、言

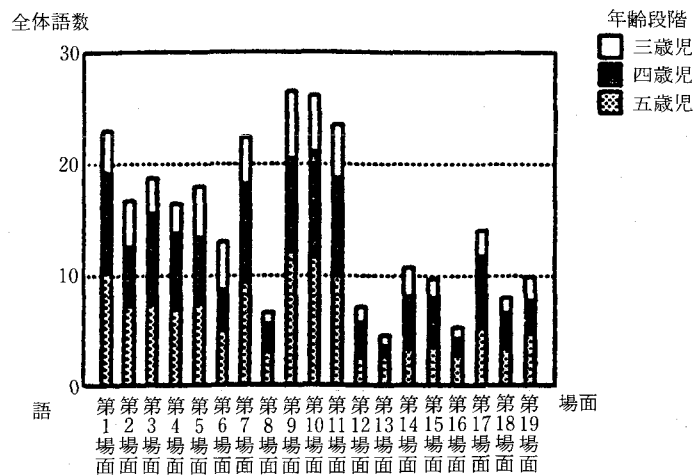


Fig. 5 全体語数の比較

葉との関連をみていく。第1場面は、昔話の典型ともいえる「昔々…」という発端句で始まるのであるが、本文のままで語る幼児が年齢を問わず多い。既有知識として、形式的なこの言葉が幼児の記憶の中にあるといえる。第7場面は、桃太郎が爺と婆に鬼ヶ島へ鬼退治に行くことを告げ、黍団子をこしらえる場面である。ここは、爺婆と桃太郎の会話で繰り広げられる場面であるが、その部分だけを再生する幼児が多い。これは、第9～11場面でも共通していえることである。その会話文も、絵本にあるような昔の語り口調ではなく、自分の言葉で語っている者が多い。

全体を通して、幼児の再生話に共通していえる特徴は、以下の通りである。

- (1)擬態語、擬声語の使用が多いこと
- (2)会話部分の再生力が高いこと
- (3)発達に伴って、物語に一貫性ができ、流れのある話を再生できること
- (4)発達段階の低い幼児ほど絵の細部をみて、その状況について説明的に語ろうとするが、発達段階が高くなるほど、絵全体をみて自分の記憶と既有知識で文芸的に語ろうとする。

上記のそれぞれの特徴について説明する。

- (1)物語には三匹の動物が登場し、「わんわん、きゃっきゃっ」などの再生率が高く、特に5歳児に多い。幼児は、これらの言葉を好んで用いる。文中の言葉が自分の語彙の中になく、低年齢の幼児ほど、動詞なども擬態語、擬声語などを使って再生する。言語能力の発達と共に、これらの言語が、はっきりとした形容詞、副詞などの言葉であらわれてくる。
- (2)会話が場面の中心をなすところは、いくつかあるが、そのいずれにおいても会話部分の再生は高く、きちんとやりとりした形で表現されている。他の部分は語らず、会話部分だけを再生するものもある。しかし、文章をそのまま語るのではなく、自分の言葉で短く簡潔に語るといふ「情報認知と言語再生」の関係もみられる。幼児にとって、会話は理解し易く、自分の言葉で置き換えられやすい。
- (3)低年齢の幼児は、絵を見て断片的に物語をとらえるため、説明的な言葉であったり、台詞部分だけだったりするが、ある程度の段階になると、「そして、次は」などの接続語がでてくるようになる。もう一歩進んだ段階になると、台詞と台詞の間に「…という」となど、物語の流れがいつそうはっきりしたものになる。これは、物語り全体を筋立てて、理解した上で語っていることのあらわれであろう。

以上から、仮説③は支持される。

Table 1 に、各年齢毎の幼児の読みレベルを示す。

Table 1 から、加齢と共に、高いレベルに達することがわかる。言葉を読む段階の幼児は、「すらすらと読む」、「一文字一文字を指差してゆっくりと読む」、「分からない字は飛ばして読む」と、さまざまである。

Table 2, 3 に、各場面、各年齢に特徴的な読み聞かせの事例を示す。

Table 2 から、P児は、事前調査で、好きなお話として、一番に「桃太郎」をあげており、家庭での読み聞か

Table 1 年齢別に見た、こどもの読みレベル 人/％

読み行動のカテゴリー	3歳児		4歳児		5歳児	
	n = 7		n = 14		n = 10	
ことばを読む (③～⑪)	0	0	2	14	5	50
書きことばで語る (⑤～⑦)	2	29	9	64	4	40
話しことばで語る (③～④)	2	29	1	7	1	10
物語文形成 (①～②)	2	29	0	0	0	0
拒否及び読んでもらう	1	14	2	14	0	0

Table 2 事例

画面	内容	こどもの読み行動	
		〈事例1〉P児（5歳児5：8）	〈事例2〉L児（4歳児5：3）
1	爺と婆の生活	ムカーシ ムカシ アルムカシ オバアサント オジイサンガ スンデイマシタ オジイサンハ ヤマヘ シバカリニ イッテ オバアサンハ カワヘ センタクニ イキマシタ	ムカーシ ムカシ アルトコロニ オジイサント オバアサンガ ヤマニ シバカリニ イキマシタ
4	桃のなかから 赤ん坊が生まれ、 桃太郎と名付けられる	モモヲ キッテ タベヨウト スルト ナカカラ アカチャンガ ギャアギャアト イッテ ウマレテキマシタ	フタリガ モモヲ ワルト モモガ スグ ワレテ カワイイ カワイイ オトコノコガ ウマレマシタ モモカラ ウマレタカラ モモタロウト イイマシタ
5	桃太郎が強く 育っていく 様子	オカユヲ イッパイ タベルト チョット オオキクナッテ ニハイ オカユヲ タベタラ イッパイ セガ タカクナッテ サンバイ オカユヲ タベタラ モット オオキクナッテ オーモイ モノヲ モモタロウハ モチマス	オジイサント オバアサンハ フタリデ モモヲ タベサスト サカナヲ タベサシテ モモタロウハ イッパイタベタラ イッパイメ ニハイタベタラ ニハイメ サンバイタベタラ サンバイメッテ ズンズント オオキクナッテ ユキマシタ
7	黍団子を作り 鬼退治にいく 準備をする。	オバアサン ニッポンイチノ キビダンゴ ツクッテクダサイ アンマリ ユウコト キカナイト ニッポンイチノ キビダンゴ ツクッテ ヤリマシタ タカラノ ハタヲ ワタンテ ケンヲ ワタシマシタ	ソコデ モモタロウハ オジイサント オバアサンニ ボクハ オニタイジニ イクカラ キビダンゴヲ ツクッテクレ マダ ワカクナイカラ オニナンカ タオセルモンカ デモ イキタイッテ ユッテ オジイサント オバアサンハ モウ ソンナニ イキタインダッタラ ニッポンイチノ キビダンゴト ハタヲ ツクッテ ケンヲ モタセマシタ
10	桃太郎が猿を 家来にする。	ソレデ エトネ イスト オニタイジニ イクト サルガ キーキート ブラサガッテ イマシタ コシニ サゲテイルノハ ナンデスカ ニッポンイチノ キビダンゴデス オトモシマスカラ ニッポンイチノ キビダンゴ ワケテクダサイ ヨシ オマエニモ ワケテヤロウ	マタ ヤマヘ イクト キャッキャット サルガ イマシタ ドコニ オデカケデスカ オニタイジダ ソノ オコシニ ツケタノハ ナンデスカ ニッポンイチノ キビダンゴダ ヒトツ ワタシニ クダサイナ ソレデ オマエニモ ワケテヤロウト イイマシタ
17	鬼の大將が 降参する。	モモタロウサンハ ドウゾ オユルシクダサイ イノチダケハ ユルシテクダサイ イノチダケハ ユルシテヤル タカラモノヲ アゲマスカラ タカラモノヨリ オヒメサマヲ カエセ デー オヒメサマヲ カエシマシタ	オニハ モウ モモタロウニ ナイテ… ナイタ… オニハ タカラモノヲ モッテキテ ソノ タカラモノヲ アゲマシタ タカラモノハ イラン ヒメヲ カエセッテ ユウテ ヒメヲ カエシテ クレマシタ

せは、あまりしていないのだが、全体語数も創造語数とともに高い数値を示している。L児は、P児と対称的に、家庭で毎日のように絵本を読み聞かされ、家族全員絵本好きであり、好きなお話の第3位に「桃太郎」があげられている。

全体を通して、P児は、きちんとした書き言葉で形成しようとしているし、その場面ごとの大まかな筋も理解できており、「桃太郎が大好きなんだ」という気持ちが、ちょっとした言葉の肉付け、つまり、文にはない台詞の形成や抑揚を付けた読み方に十分にあらわれている。L児は、文体は最初、常体と敬体がまじっているが、書き言葉でお話している。はじめの緊張がだんだん解けて、お話の世界に引き込まれていく様子が、語り口からよく伝わってくる。たくさんの絵本と触れ合っている分、他の幼児よりも感受性が強く、それぞれの登場人物の立場に立って、会話を楽しんでいる。P児もL児も自分で台詞を付けて、そのものの立場で物語を「語

Table 3 事 例

場面	A児 (4:2)	B児 (5:3)	U児 (5:11)
1	オバアサンガ カワデ モモトリマシタ (5) 創作的語り	ムカーン ムカーン アルトコロニ オバアサンガ カワデ センタク シテイルト (7) ことば通りに語る	アルヒ オジイサント オバアサンガ シバカリニ イキマシタ (7)
2	モモカラ ワレテキマシタ ○注釈を書きことば で語る	ウントコシヨ ウントコシヨ (2) 動作の再現	オジイサンニ トッテカエロウ オバアサンハ ウマイ モモッコヲ オウチニ オジイチャンニ(間) モモヲアゲマシタ (5)
6	モモタロウト… カラス (ため息) カラスト モモタロウガ アソビヨルトコ (1)	カアカアーッテ… オレハ オニヲ タイジニ イッテクルッテ イッテ (素早くめくる) (4)	ココ ワカラン (8) 「読めない」という意識
7	オダンゴ ヤキヨルトコ (1) 命名と注釈	タベテ (1)	ソシテ オジイサンガ エット モモタロウガ オニヲ (5) ヤツケニイクカラ ケンヲ カシテクレルト オジイサンハ ハタモ ツクッテ クレマシタ
12	イキヨルトコ (1)	デ イッショウケンメイ イッタ (4) 独自の話しことばで語る	ソシテ モモタロウサンハ オニヲ タイジニ イキマシタ (5)
13	(ページを見る) (9) 飛ばし読み	デ ジャーッ ジャーッテ (船を指で何度も 撫でる) (2)	ウミヲ コエテ ユクト (7)
18	ココニ イキマシタ (鳥を指差す) ◎	(ページをめくる) (9)	モモタロウサンハ ランランラント イッテ ウチヘ カエリマシタ (5)
19	ココニ カクレテ キマシタ コンナカニ… ◎	チャッ チャッ チャー チャッ チャッ チャー ヨカッタネ (2)	ソシテ ミンナハ オオヨロコビデ オジイサント オバアサンハ ホメテクレマシタ (5)

(3) 対話的話しことばで語る

(10) 読めることばに書き換えて読む

(11) ひとり読み

る”所が類似点である。

Table 3 から、A児の言葉は、絵の説明で、画面の絵とお話の筋への推理力をよりどころに絵本を見ている。B児の言葉には「…しました」のような区切る言葉があまりみられず、話し言葉が多い。その場面ごとに、登場人物になりきって、対話的言葉を語るのは、絵を説明する段階から、お話を聞き、人物の立場で言葉を語るという段階へ移行したことのあらわれである。レベル2と考えられる。U児は、お話のおもしろさのエッセンスを十分に自分の中に吸収し、言葉のリズムや抑揚の中で、より賑わまして表現している。書き言葉的な口調、創作的語り、もまじえながら、自分の記憶に残っている本文を語っている。レベル6から7の段階である。

以上から、幼児の読み行動をサルツビーのレベルの中の1つにだけ当てはめるのは、大変むずかしい。1つ1つの段階をふんで発達していくのではなく、レベルの中を出たり入ったりしながら、最終地点のひとり読みのレベルに達する。4歳のA児やB児には、物語の筋はないが、所々、感情のこもった表現をしたり、書きことばで語る場面もあったりする。逆に、5歳のU児が、動作を加えたり、抑揚をつけたりしている。

以上より、仮説④は支持される。

結 論

- (1)画面を見て多くの言葉で語れたり、画面に書かれている言葉と近いことばで語れたりすることは、加齢と共にそなわってくる。
- (2)幼児は絵を手がかりにお話を再現するが、抜けた部分は想像力で補ったり、自分の言葉で表現しようとする。
- (3)表現には、擬態語、擬声語などが多く、決まりきった文句、今回使用した「桃太郎」などの昔話には必ずでてくる発端句や、各場面で繰り広げられる会話部分では、本文に近い形で再生しようとする。様々な過程を辿りながら、最終的に、一つの流れをもったお話作りを、絵をみながらできるようになる。つまり、幼児の「読み行動」の一般的特徴が見いだせる。
- (4)幼児の読み行動は、サルツビーの11のレベルの1つ1つ段階をふんで発達していくのではなく、複数のレベル要素を含んで発達していく。

参 考 文 献

- 宮野英也 1970 幼児期の文学教育 明治図書
水谷孝子 1988 絵本と読み聞かせ 岡本夏木(編) 認識とことばの発達心理学 ミネルヴァ p. 287-312
佐藤公代 1993 絵本の挿絵の役割に関する研究-発達・教育心理学の立場から考える- 近代文芸社
内田伸子 1986 ごっこからファンタジーへ-子どもの想像世界- 新曜社

付 記

実験者の幡田尚子氏、中村保育園の園長先生、諸先生、園児達、保護者の皆様に対し、いろいろお世話になりましたことを心より深く御礼申し上げます。